

明日を拓く企業の戦略

成長する企業には独自の戦略がある。企業の今を、そしてこれからを創るその戦略に迫る



本社 岡山市南区福成2-23-18
 事業内容 日立製作所・日立グループの専門商社及びFA・DX・GX等各種システムの設計・施工・保守管理
 代表者 岡崎世作
 創業 昭和21年(1946年)
 資本金 4,950万円

双葉電機(株)

徹底した「見える化」とチームワークでエンジニアリング企業として飛躍

工場向けFA（ファクトリーオートメーション）システムや、電力供給システム、環境（カーボンニュートラル）システムなど社会インフラ設備を取り扱う双葉電機(株)。商社機能だけでなく、各種システムの企画・設計、施工、管理、メンテナンスまでをワンストップで行える強みを持ったエンジニアリング企業として、年商96億円を超える企業となった。同社の発展を支えた要因は何だったのか、33歳での副社長就任以来、31年の長きにわたり事業を牽引してきた4代目社長の岡崎世作氏に話を聞いた。



聞き手・執筆 井ノ上美恵子 (フリーアナウンサー)

FA拡大路線でエンジニアリング企業へ

昭和21年、日本中が戦後の混乱からの復興を目指していたころ、社会インフラや工場の再建のため各地から資材を集め販売を始めたことが、双葉電機(株)のルーツである。

同社の前身・双葉電機商事(株)は日立グループの専門商社として、家電機器と、発電設備や工業施設などで使用する重電機器の両方を扱っていた。しかし昭和30年代に家電メーカーの過剰生産と廉売合戦で家電事業が行き詰まりを見せたことから昭和36年に分社化、重

電事業に特化した双葉電機(株)として再スタートを切る。

岡山県下では水島臨海工業地帯に次々と企業が進出した時期で、爆発的に重電事業の市場は拡大、高度経済成長の波に乗り同社も大きく発展を遂げていった。

岡崎氏が入社した昭和60年当時、製造業の現場ではFA（ファクトリーオートメーション）が進化する時を迎えていた。とは言え、生産の自動化はまだまだ不良品の発生が懸念される段階で、商社としてこの機器を扱うにはリスクが高い状況ではあったが、将来を見据え

FA拡大路線に舵を切る。「このチャレンジが、商社からエンジニアリング企業に移行する大きな転換点でした」と岡崎氏は振り返る。

FAシステムが製造現場で存在感を増すに当たって同社は多くの実績と高い専門性を獲得、製造業から建築関連、ビル系都市開発、そして社会インフラへと販路が拡大し、エンジニアリング企業として業績を伸ばすこととなった。

徹底した「見える化」が社内を変える

平成4年に副社長となった岡崎氏は、2年がかりで新たなシステムを構築する。売上と利益の全社・部門別・個人別実績や、顧客に提案した案件ごとの進捗・実績状況などをリアルタイムに社員全員が把握できるようにしたのだ。従来であれば経営層が把握するレベルの情報を実社的に共有し、各人が経営者目線で仕事を捉えるきっかけとなった。

また特に注目されるのは、会社の業績に対する自分の貢献度までも各人が確認できるようにしたことである。まさに業績の徹底した「見える化」であった。

36歳の若さで4代目社長に就任した岡崎氏は平成16年、中期3か年計画をスタートさせる。この時宣言したのが、目標数字を超える結果が出れば、超えた利益を社員に還元するという大胆なものだった。

高い数値目標を掲げた計画ではあったが、経営者目線で目標にコミットした社員は高いモチベーションを發揮する。業績に貢献しているという個々の実感も後押しし、計画は見事達成。成果は特別賞とヨーロッパ旅行という形で社員に還元された。

バブル崩壊やリーマンショックの時には一時的に業績が悪化したものの、製造業、建設業、社会インフラを3本柱に、幅広く事業を展開しリスクを低減させていたことなどから立ち直

りも早く、同社は順調に右肩上がりの成長を続ける。

岡崎氏の入社した頃は約60人だった社員数は、今では150人に増加。特に技術系社員は全体の約半分を占める体制となっている。

培ったチームワークで社業発展へ

岡崎氏は平成28年の本社オフィス新築のタイミングで、新しい取り組みとしてフリーアドレスを取り入れる。紙ベースの資料はデータ化しサーバー上で管理、情報の共有が進んだ。また、必要に応じてオフィス内で迅速かつ柔軟にミーティングができ、業務のスピード化も図られた。

オフィス新築については、同社の社風を示すエピソードがある。新築時、営業部門と技術部門は二つのフロアに分かれていた。営業の電話が鳴り響く環境では技術部門の仕事がやりにくいだらうという配慮からだ。だが、ワンフロアにしてほしいという要望が、意外にも技術部門からあがり、岡崎氏を驚かせる。

同社では旧社屋で約30年前からワンフロアで業務を続けていたが、夏の暑い日にメンテナンスに走り回る技術者の姿、得意先からの電話に頭を下げる営業マンの様子などを目の当たりにすることで、いつしか互いの状況を思いやる社風が育まれていた。「そうだ、このチームワークが事業を発展させて来たのだ」と再認識した岡崎氏は早速レイアウトを変更。現在はフリーアドレスのオフィスで、別部門の社員が肩を並べて仕事をすることもあり、普段は接することのなかった社員同士、先輩後輩の間でコミュニケーションが生まれ

ている。双葉電機(株)は、設計・施工・管理・メンテナンスまでワンストップで行える技術力と培ったチームワークを武器に、顧客に提供する価値を高めていくことで今後も社業を発展させていく。



FAシステム(生産設備の自動化)により、人材不足や生産性向上を背景としたニーズに対応。顧客の要望に沿ってラインを形成し、導入の検討から運用保守管理までワンストップでサポートしている



3年前に浅口郡里庄町に開設した西部オフィスは、SDGsの取り組みの一環としてCLTを採用。高い断熱性を生かした省エネ建築物で、天井クレーンを設置し業務の効率化を図る



岡崎世作氏は大学卒業後、大阪の日立特約店に4年半勤務。26歳で双葉電機(株)に入社。36歳で4代目社長に就任した。「社員一人一人の自発的に取り組んでいくマインドを育てたい」と人材育成にも力を注ぐ



産休明けに保育園が見つからず社員が復帰できなかつた経験をきっかけに、敷地内に企業主導型保育園を開設。出産、育児などのライフステージに左右されず安心して働き続けられる職場環境を創出し「おかやま子育て応援宣言企業」にも認定されている